

川端康成論

和田 勉

作品に即して解明したい。

具体的には、「精霊祭」「空に動く灯」「新浦島物語——海中の
新理想國——」「孤兒の感情」「春を見る近眼鏡」「花ある寫眞」
「水晶幻想」「抒情歌」「復讐」「化粧と口笛」「翼の抒情歌」「禽
獸」等を主に採り上げることにする。

隨筆「人造人間讚」(昭4・8)でも、「今や詩的創造は文學
を離れて、科學の手に移った」とある。「人間が工業的に人造出
來る」時代を予見しながら話が展開している。人間を科學的に
解明することに川端が関心を持っていたことが窺え、このよう
な視座から川端の文學を捉え直す必要がある。文理融合した研
究を行うことによつて、川端の側面が明らかになると思われ
る。^{註1}

なお、川端の思想に、万物一如・輪廻転生があつたことは、
既に広く知られている。この思想と生物学的な要素の関わりに
についても掘り下げたい。

二

それでは、生物学的なことが表出されている川端の作品につ
いて、書かれた順に具体的に検証したい。

「精霊祭」(大12・4)の中に、「一休和尚、七月の精霊祭に、
『山城の瓜やなすびをそのままに手向けとなれや加茂川の水』

川端康成の文學の中から、優生学に関わることや動植物が採
り上げられたものなど、生物学的な内容が表出されている作品
を中心に分析したい。なぜ、作品の中にそのようなことが描か
れ、いつ頃から関心を持つようになったのか。また、そのこと
が川端の文學の特質として、どのように説明できるのか検証し
たい。この試みによつて、従来ほとんど触れられなかつた川端
文學と生物学的な要素との関わりを明らかにするのがねらいで
ある。

更に、川端作品の持つ現代性や前衛性についても言及したい。
優れた文學作品は、常にその作家以前の価値観や美意識に対し
て異議を唱え、独自に塗り替えているものである。その実態を、

何と大きな精霊祭ぢやないか。今年出来た瓜も精霊なすびも精霊、加茂川の水も精霊柿や有りの實も精霊、死んだ亡者も精霊生きてゐる者も精霊、祭る人も精霊、此精霊達が打寄て、無心無念の御對面扱々有難やと思ふばかり、ただ一體の精霊祭則是を一心法界の説法といふ。法界則一心なるゆゑ、一心則法界ぢや。草木國土悉皆、成佛祭と云ふものぢや。天地萬物死せるも生けるも精霊たらぬはなく精霊達は一つに通ひ合つてゐる」とある。天地萬物が一つのものであるという視点から記されていゝる。あらゆる生物・無生物に宿る超自然的な存在を崇拜してゐることが窺える。この一休和尚の精霊祭の歌及びその説明は、ほとんどそのまま『抒情歌』の中にも取り込まれている。語り手の龍枝が、輪廻転生・万物一如をありがたかることの例証という形で機能している。

「空に動く灯」(大13・5)では、関東大震災後が背景とされている。そこには、命のはかなさと蘇生への願望が描かれている。冒頭部では金原訓導の友人が、このような混乱した社会に廻轉生の説は、來世で蓮の花に乗つかるために、此世で善根をつまねばならん、蛇には生れ變るなといふ風に、坊さんの御説教の道具にされてゐたやうだがね。誰かが新しい生命を吹き込んで眞理にしてくれるといいんだがな。物質科學的にも、精神科學的にも證明してくれるとね。大體人間は、人間と自然界の

森羅萬象との區別を鮮明にすることに、永い歴史的の努力を續けて來たんだが、これは餘り愉快なことぢやないよ。人生を空虚に感じる心の大半は、そんな努力の遺傳から湧いて來るのぢやないかしら」と言う。「誰かが新しい生命を吹き込んで眞理にしてくれるといい」というような「物質科學的」なこと、つまり「人間と自然界の森羅萬象」が同じ物質でできていることを、現在の分子生物学は明らかにしたが、それにつながるようなことが、ここには既に表出されている。「万物一如」という言葉は、川端の物の見方の根本にある信条のようなもので、それが正しかったことを現代の科學は証明した。そのことは、川端の物を見る目に、先見性があつたことも示していよう。

更にこの友人は、「輪廻轉生の説を燒野に咲く一輪の花のやうに可愛がらねばなるまいよ。人間が、ペンギン鳥や、月見草に生れ變るといふのでなくて、月見草と人間が一つのものだといふことになれば、一層都合だがね。それだけでも、人間の心の世界、言ひ換へると愛は、どんなに廣くなり伸びやかになるかしれやしない。一元にして多元、萬有靈魂にして一神」と説く。だが、金原訓導は、この友人の話をもとはは聞いていない。この友人の話は、普遍的な眞理を語るというよりも、震災後の混乱した時代において、周りの人に直觀的に思つたことを語つてゐるといふ働きしかしていない。輪廻轉生の説を賛嘆するこの友人は、この説に臆面もなく寄りかかることによつて、

作品中では観念的な人物として戯画化して描かれている。

ヒロインの「お花」も、このような主張とは関わりなく、人として現世の生を肯定して生きようとする。表題の「空に動く灯」には、避難所での貧しい暮らしの中で、夜空を照らす灯りという背景だけでなく、お花の男にすぎる奔放な心身も込められている。

ところで、川端は随筆「初秋山間の空想」(大14・11)の中で、ここに挙げた金原訓導の友人の話を挙げ、輪廻転生の説が「これまでの人類が持った思想のうちでは最も美しいものの一つだと思ふ」と述べている。この友人の話が、川端の思想の本質につながるものであることが分かるが、「空に動く灯」では、主張そのものは脇にやられ、それほど重要とはされていない。この友人の批評的な言説と、震災後にひたむきでありながら奔放に生きるヒロイン「お花」の話とが有機的につながっているとは言えない。

「新浦島物語——海中の新理想國——」(大13・7)の中に、「種の存続が出来れば、草木は花咲く必要なく、鳥は囀る必要がない。それに女の美なぞは悲劇と罪惡の源だ。現に君もそのために自殺したんじゃないか。アトランチス國では、アダム、イヴ以来の問題をみごとに解決したんだ。この國の結婚法は君にも分る機會があらう」とある。社会的民主國のアトランチスでは「結婚の均等」ということで、「戀愛とか云ふ野蠻な習慣に

は國家が干渉を加へ、科學に基いた公平な法則で、各個人の配偶を決定することになった」とある。その他に、この國の民衆の受ける幸福として、「虚偽虚飾の全滅」と「食物分配の均等」が挙げられている。

アトランチス國では、貧困や失恋もない、一種のユートピアが示されている。差別に満ちた地上の國に絶望して海に身を投げた「僕」が、海中における國家統制の共產主義國に幻滅して地上に逃げ帰るといふ寓話によって、現世の人間社会と海中のユートピアの両方を風刺しているのである。だが、想像力の質そのものについては改めて問題にされてよいだろう。作品末尾に「(某富豪著『くらげ』より)」という架空の書物まで付け加えられており、あくまで富豪の側から、國家統制の平等社会を批判した書物に拠っているという配慮が窺える。

表題に示されたように、浦島太郎における龍宮城に対するパロディとしてイロニカルに表出されている。特にこの國では男女が同じ姿形をしていて、美醜の差がないのであり、不幸もなにかわりに幸福もないというのである。拘引された少女は、「平等は人間を木乃伊にする」と主張する。これは、アトランチス國への批判ということであるが、作者川端に即せば、國家統制による全くの均等社会が個性の抹殺につながりかねないことに警鐘を鳴らすという側面も窺えるであろう。

「孤兒の感情」(大14・2)では、幼くして両親を亡くした主

人公「私」の、自己のルーツを探る思いが記されている。「私」の友人で、「私」の妹と結婚するつもりの中野は、井守の交尾を研究していた。「彼は大學の動物學科を卒業して、大學院で發生學を研究してゐるのであつた。春の日曜日の正午、笠原は醫學の解剖學教室へ私を誘つた。彼の研究室は二階の明るい部屋であつた。笠原は強燭光の電球を顯微鏡に反射させ、種板を何枚も入替へて、私に覗かせた。新しい人間をこの世に生み出すために男と女とが體の内に持つてゐる細胞を、何千倍かに廓大して、私は眺めてゐるのである。笠原は人間發生の科學を熱情的に解説した。また、どうして男が生れ女が生れるか。人間やいろんな動物の生殖細胞と受精卵との染色體を顯微鏡で數へ雌雄を決定する性染色體に就て説明した」とある。遺伝學者の笠原は、人間を含めた動物の誕生や生存を、生物學的に捉えて説明する。

「人間の男女が持つ細胞も、顯微鏡では、バツタの雌雄が持つ細胞と同じ取扱ひを受けてゐる。しかし、男と女とが同じ感情と感覺とを昂奮させ、時にはこのために人間同志で『醜いけどもの』と呼び合はねばならなくなる力の源が、まことに美しい空色の裝飾の圖案のやうに見えるのを、私は不思議に思つた」とある。笠原は、人間を細胞レベルで科學的に捉えて説明するが、「私」にはそれは現実離れした不思議なことに見える。

「私」は、妹と同じ遺傳を受けているから、妹と結婚すること

は叶わないと思う。「孤兒の感情」では、孤兒のもつ浮浪性というものが中心になつてゐるが、一方で、解剖學者の笠原を登場させたりすることによつて、人間を生物學的に捉えることや遺傳のことが取り上げられてゐる。そこには、自己のルーツを科學的、物質的に解明したいという川端の思いが投影されてゐるとも言える。

「春を見る近眼鏡」(大15・4)の中には、「さち子は近眼である。彼女と結婚をすれば、彼女から三人の近眼の子が生れ、その子等から九人の近眼の子が生れ、そして十二代目には十七萬七千四百七十七人の近眼の子孫が繁殖し、やがて全人類が近眼である時代が来るだらう」とある。これはあくまで近眼が遺傳するという前提に立つて計算した、未來への推測である。

さち子は「決して人の悪口を言はないといふ美德」も持つてゐる。さち子と結婚すれば、同じような子孫が鼠算式に繁殖すると、英一は空想する。結末では、さち子の父も近眼であり、研究室で顯微鏡ばかり覗いていた植物學者であり、既に亡くなつてゐたことが明らかとなる。また、亡くなつてゐたはずの母は健在で、悪い噂のある人であることも分かる。眞實を知らされたさち子は、「鼠算用で計算出來さうもない複雑な女」の表情を示す。さち子と結婚すれば、同じような子孫が鼠算式に繁殖するといふ英一の夢は、宙に浮いたままとなる。

「春を見る近眼鏡」では、さち子の長所や短所が子孫への遺傳

との関わりで、英一の目を通して描き出されている。そこには、生殖による生命の連鎖がどのように為されていくかということへの関心が、空想的に綴られている。主人公英一にこのような形で遺伝への関心を持たせているところに、川端の遺伝への関心が投影されていると言える。

三

隨筆「彼女等に就て」(昭4・9)の中には、「不染妊娠は最早聖人英雄の傳説ではなく、科學、人間が養殖の鮭のやうに受精する人工妊娠——現にその手術を受ける女があり、その子を天然妊娠の子と同じく愛する女があり、われわれ男を肌寒くさせる、女のそのやうな根性があるならば、私は一つ遠き未來に就て考へて見よう。家庭は——なくなるか、甚だしく變つたものになるだらうが、家庭には出産がない。出産は婦人の職業となる。出産職業婦人は國立出産場に働いて、出産の熟練工となる。最も高級の婦人職業。優生學の條件に適つた女だけがそれらに選ばれ、同じく優生學の見方から人間の素が養殖される。世界は父のない、不染妊娠の子ばかり」とある。ここには、現在のデザイナーチャイルドにつながる問題が記されている。「出産職業婦人」というのではないが、アメリカなどに見られる「優生學の條件に適つた」形で受精卵の操作である。

また、「線蟲類の雄腹の中には、消化器がなく、女のためのものばかりが一ぱいだ」とも記されている。因みに、線蟲の遺伝子数は美宅成樹の『分子生物学入門』(平14、岩波書店)に拠ると、一六三八四で、三万〜四万のヒトとそれ程違はない。だが、雄の線蟲は生殖器官しか持つていない。線蟲に関心を持つことで、生き物を科學的に解明しようとする川端の志向が窺える。

「花ある寫眞」(昭5・4)では、卵巣摘出手術と、いとこやみさ子や令嬢という女性三人の人格の變化との関わりが、実験的な内容として採り上げられている。「卵巣を取ってしまったところが、僕には一人あります。その手術は、彼女が結婚をし、また男の子を一人産んでからのことでした。卵巣がなくなると、彼女は急に太り出しました。(中略)人間には魂といふものがあるかないか——そんなことは、女には卵巣があるかないかと考へたことがないのと同じやうに、僕は考へてみたことがあります。けれども、この二人の女(いとこみさ子のこと——引用者注)の場合だけを見ると、僕には不思議なわけですが、卵巣とは女の魂であつたのでせうか」とある。

貧しいみさ子の卵巣を、裕福な令嬢の腹に移植する手術が行われる。「令嬢は貧しい娘のその卵巣で結婚をします。——子供を産みます。子供は誰の子供でせうか。令嬢のですか、みさ子のですか」と問いかける。令嬢の婚礼の写真が載つた新聞がみ

さ子の周りを飛び回るといった超常現象も、移植されたみさ子の卵巣そのものが魂をもって活動したということを強調した表現であろう。

表題には、植物の生殖器である花は、動物の卵巣に相当するという寓意が込められていよう。結末では、卵巣を摘出したみさ子の、女としての空虚感に思いが馳せられている。なお、三田英彬は「花ある寫眞」について、「川端の心靈学を応用した作品は大正十四年に始まり昭和二、三年に多いが、この作品もその一つ」と述べているが、生物学的な側面からも捉え直すべきであろう。

「水晶幻想」(昭6・1、昭6・7)では、主人公を産婦人科医の娘、発生学者の妻として、夫婦の間に子供がまだないという設定である。また、この家へ犬の交配のために訪れる令嬢や仲介の犬屋を登場させることで、性や生殖の問題について科学的に言及することが為されている^{註3}。

「顕微鏡で見せていただく結婚細胞だつて、ほんたうに美しい色模様としか私には思へないんですもの。受精卵が變化してゆくところなんか、神さまの圖案だわ。あの、いつかプレイ・ボイ(飼ひ犬の名前——引用者注)のお腹にわいた蛔蟲、あんなにいやらしい蟲もあんなに美しい細胞を持つてゐるつて、教えていただいただけでも私はしあはせなの」とある。夫人は夫について、「賣れもしない、發生學の本を一冊書いたことがござ

いますのよ。その本の動植物の名の索引に、日本住血吸蟲、二枚貝、鶏、ニンゲン、お分りになりました? ニンゲンの下に括弧をして、ジンルキ、ヒトをも見よ、でございますつて。人間も草履蟲もヘリオトロオプも區別がない人間ですもの、どうせ人間を馬鹿にしてゐるんでございますけれど」と述べる。夫は自分達夫婦の性を、犬や蜂や回虫と同じようなものとして考へている。ここに「ヘリオトロオプ」を挙げているのは、この木に咲く花に強い芳香があり、それによって他の生き物を引きつけることによる。それは、すぐ後に、「お嬢さんの安つばい香水」が連想されていることでも示されている。

「うららかな春の空へ、女王蜂が結婚を求めて飛ぶ。雄蜂の群がお伴をする。群のなかのただ一匹の雄蜂が、ただの一度女王蜂に愛される。女王蜂の受精囊。彼女は雌を産むことも、雄を産むことも、思ひのままである。雄と雌とは彼女の産室によつてちがふ。女王室と働き蜂室とは受精卵を産んで、雌。雄蜂室へは不受精卵を産んで、雄。受精囊の精子を輸卵管へ送らなければ處女生殖。雄が雌の消化器のなかに棲んでゐて、生殖の時に輸卵管へ移つてゆく、ボネルリア。ちつちやな可愛い亭主。一生涯交尾をつづけてゐる、日本住血吸蟲。體の半分が雄で半分が雌であつたり、三分の一が雄で三分の二が雌であつたり、雄から雌になつたり、雌から雄になつたり、まひまひ蛾。幼い雄が成長して雌になる、サルパやめくらうなぎ」とある。蜂以

外にも、ボネルリアやサルパなどまで挙げられていることに、発生学者の「夫」らしいところが示されているが、そこには川端自身のいろいろな生き物の生命の継承への強い関心も窺える。このような生物学的な言説を取り込むことによつて、文学作品の新鮮さと独自性を確保しようとしていたことが窺える。因みに、例えば、サルパは原索動物で、有性個体から単独で浮遊する無性個体を生じる。また、日本住血吸虫などの例に見られるように、種の継続こそ生物の存在理由なのではないかと考える姿が示されている。

夫人は「夫の顕微鏡のなかの性染色体」に関心を示し、「人間はどこ一つ動物とちがつてゐないといふ生物學説が、なぜ私人にだけ悲劇的なのか」とも思う。これは、夫によつて人工授精を試みられ、動物同等の扱いを受けたと屈辱を覚えていたことによると思われる。また、「犬の方がずっと科學的に進んでゐるのかもしれないわ。いい犬の結婚は優生學一點張りでございますもの。人間はせつかく優生學といふものを知りながら、それを人間に役立てることが出来なくて、家畜の改良に用ひてゐるなんか」と言う。優生學を踏まえた人間の交配に、登場人物のみならず、川端自身も関心を示していることが窺える。

人工的に子供を作ろうとする夫に対して、妻は「あなたの實驗室から、人造人間の生れるのを待つてゐる方がいいわ。その子供を愛する方が、発生學者の女房らしいわ」と皮肉をこめて話

す。更に「ウテラスさへ培養液のなかに生かしとけば、女はいらないつていふのが、あなたのお考へだわ。アミイバみたいな單細胞生物の生殖こそ飾りのないもので、生物の進化はみんな虚榮といふことになつてよ」と言う。進化したゆえに生じた女の虚榮に、夫が不信感を持つてゐることに、妻は不満を述べる。

「人間？ やつぱり死刑囚だつたの？」という結末の一文には、人工的に動物の交配を試みる夫への、妻からの疑問や批判も込められている。更に夫人の心境を掘り下げれば、死がプログラムされていることを生物としてのヒトの宿命として直視する姿が示されている。^{註4} 死を宿命づけられた生物としてのヒトの実態を極限まで追究する夫が自殺する姿を、妻は連想してしまふのである。

「水晶幻想」という表題には、顕微鏡のレンズを通して見る神秘的で幻想的とも言えるシーンが、生命活動の源であるという思いが表出されている。

随筆「いささかの反語」(昭6・10)の中に、「私は動物園が好きである。しかし、一つの動物を長く見てゐると、樂しさは消える。どんな動物も、必ずどこか人間に似てゐる。犬を飼つてみて思ふのだが、あらゆる動物の生活には、必ずなにかの教訓が含まれてゐる。人間は所詮、いかなる動物もが持つてゐないやうな美德は、考へ出すことが出来ないからである。生物學は細胞學とか発生學とか、細かいことに入るほど、人間と動物

との區別はなくなつてゆくものらしい。素人がそれらのことを知ると、人間に幻滅することもあらうが、しかしまた、一つの廣い悟りを感じることもあらう。それは、生物界でひとり著しい人工の進歩を遂げた人間の郷愁といふよりも、もつと廣い悟りである。原始的な汎神論を除くと、最も多く動物を取り入れた宗教は佛教であらう。佛典には、廣い生物界の美しい詩が含まれてゐる。バイブルの淺い狭さなぞは、比べものにならない」とある。この随筆の前半では、川端が動物に対して精緻な觀察をしてゐることが窺える。細胞学や発生学への関心も示されてゐる。後半では、人間だけを絶対視するキリスト教に比べて、万物の生命につながる仏教の素晴らしさを贊嘆してゐる。

「抒情歌」(昭7・2)には、愛する人と現世で添い遂げられなかつた龍枝の悲しみが綴られてゐる。現世で人間としての愛憎に生きるよりも、植物への転生を願う。「佛法のいろいろな經文をたぐひなくありがたい抒情詩」と思う。仏法の經文にある、前世・現世・来世にわたる植物を含めた輪廻転生を叙情詩と捉えてゐるのである。

「昔の聖者達にいたしましたも、近頃の心靈學者達にいたしましたも、人間の靈魂のことを考へました人達は、たいてい人間の魂ばかりを尊んで、ほかの動物や植物をさげすんでをります。人間は何千年もかかつて、人間と自然界と萬物とをいろいろな意味で區別しようとする方へばかり、盲滅法に歩いて來たので

あります。そのひとりよがりの空しい歩みが、今になつて人間の魂をこんなに寂しくしたのではありませんでせうか」とある。ここには、人間も他の動植物も生き物として同等であると捉える視点が示されている。しかも、「科學者は物質を造るもともいふべきものをこまかくたづねてゆけばゆくほど、そのものは萬物の間を流轉すると知らねばならなくなつたではありませんか」と、この考えが、科學的な根拠に基づいてゐると述べる。

「抒情歌」では、仏教の輪廻転生やギリシャ神話の転生の有難さが説かれてゐる。このような転生にまつわる評論的な内容を、心靈能力を持つ龍枝の呪いや哀しみや願いに託して表してゐる。龍枝の来世で植物へ転生したいという願望によつて、具体的なイメージとして描き得てゐる。^{註5}

「復讐」(昭7・7)では、次子は「子供が親に似てゐないのは、神をけがすやうな恐しい罪なのかしら」とか「親は自分に似てゐる子供しか、可愛がつてくれないものなのかしら」という疑問を持つ。また、「いちどきに産れる雙兒でも、父親のちがふことがあり得るつて、なにかの本で讀みましたけれど、ほんたうなんでございませうか」という問いを医者にする。医者も、そういう学説があることを認める。

結末では、双子であるのに、次子と鈴子は血液型が異なることが明らかとなる。これは科學を踏まえてゐるといふよりも、交通事故に遭つた鈴子に次子から輸血したが、拒絶反応が起き、

絶命しかねないという予想外の展開を意図したためのフィクションであろう。

なお、「復讐」では、女優の阿部鈴子に瓜二つの双子次子に焦点を当てて描いているが、『古都』でも双子が扱われており、幼くして生き別れになった双子、自己と瓜二つの存在への川端の関心が窺える。

「化粧と口笛」(昭7・9、11)では、留伊子と恋人尾竹、前夫西住との関わりや、尾竹と夏子、西住と小杉夫人などの人間模様が描かれている。幼な児への死化粧や夏子などの吹く口笛が、表題とされている。そこには、複数の男女による恋愛模様も象徴的に込められている。ただし、多くの登場人物が出てくるわりには、それらが有機的に機能しているとは言えない。本稿では特に、幼な児を亡くした留伊子と尾竹とのやりとりを注目したい。

『さつきの蟻ね。』と、尾竹はつとめて明るい聲で、『結婚する時だけ羽が生えて、空高く亂舞するんですから、人間の結婚よりロマンチックですよ。結婚がすむと直ぐ羽は落ちる、體はみるかげもなくやつれる。さうして卵を抱いて子を育てるんですが、その間はなんにも食べない、幼蟲に口移しで飲ませる唾も、體の組織を自己消化したもので、つまり自分の血肉をそいで子供を育てるんですよ。』『乳牛や蟻にも私が劣るつて教へて下さるつもりかしらないけれど、女を理性的にさせるつてこと

は、男の恥の場合が多いことよ。』とある。他の生物と比較したり、身体の仕組みを即物的に説明したりする尾竹への、留伊子の女性としての嫌悪が示されている。

「化粧と口笛」には、子供と別れた留伊子における本能と理性の対立・葛藤が随所に描かれている。尾竹は、留伊子の姿に「母なるものの動物じみたエゴイズム」を見ている。また、「自分の年とつてゆくのを忘れさせてくれるのは子供しかないつてことは、あらゆる生物の楽しい悲劇ですよ」と尾竹は言うが、人間を生物の一種として相対化して客観的に捉えていることが分かる。

「翼の抒情歌」(昭8・1)では、美恵子・綾子の姉妹と北海道の微妙な恋心を軸に展開する。表題には、伝書鳩に託して思慕の情が表白されることが込められている。

この作品に綴られた生物学的な言説を中心に見ていく。綾子は優生学を踏まえて、鳩が番となる仲介をする。それについて照子は、「なんだか聞いてみると味氣ないわね。優生學一點張りの結婚だなんて。鳩つてもつと、ロマンチックな鳥なんぢやないの。だつて綾子さんだつて、さうぢやない。科學一點張りの人が國を支配して、結婚省の大臣といふやうなものが出来て、法律かなんかで、優生學的に結婚を強ひられるんだつたら」と述べる。すると綾子は、「その方がよくはなくて? まちがった戀愛なんて、無駄な生活が一切なくなつちやつて。私の結婚さ

せてやつた鳩は、みんな夫婦仲がいいんですもの」と反論する。^{註6}
鳥が求愛のダンスをするシーンを見せられて、照子は、「求婚舞踊——といふものが、人間にも大昔はあり、今もその遺風が見られるばかりではなく、現に未開民族はそれを行つてゐるくらゐのことは、踊を少し習つた照子は十分知つてをります。蜘蛛やその他の動物でさへ、戀のためには踊ります。さうとは分つてゐても、目のあたり見るのは、今はじめてですから。ゴロップ、ゴロップと鳴きながら、雌のぐるりを踊り廻つてゐるのは、雄でした」と思う。

「翼の抒情歌」では、相思相愛の仲の人と巡り合う難しさを思う綾子は、その対極に優生学に基づく鳥の交配ということも考へるのである。人間の恋愛が思うにまかせぬのと比べると、優生学に基づいて鳩の交配がなされ、綾子がむしろそちらに引かれるところに、この作品の特質はある。

随筆「わが舞姫の記」(昭8・1)に、「人間の肉體に恵まれた、自然の、正しく、美しい姿や動きは、舞踊の訓練によつてでなければ、最早人間は現すことが出来ない。例へば、私はこの間も油壺の水族館で、魚の游泳の美しさ、造化の妙に、しみじみと見とれたものであつた。魚ばかりではない。私がインドやアフリカの動物生態の探検映畫を見て楽しむのも、動物の動きの美しさのゆゑである。魚の泳ぐ、魚の舞ふ、蟲の飛ぶ、獸の走る、つくづくそれを眺めれば、人間ほど醜いものはないと、

憂鬱にとざされることがしばしばである」と記されている。「魚の舞ふ」という箇所については、前後の文脈からすると、「鳥の舞ふ」の方が妥当ではないかと思われるが、「改造」(昭8・1)の初出も昭和五十七年刊行の『川端康成全集第二十六巻』(新潮社)も、同様の表記となっている。「改造」の初出で誤植のまま、それが全集でも踏襲されたのであろうか。^{註7}それとも原文のまゝ、水族館で見た魚の美しさを強調するために、二度にわたつて記したのであろうか。前者がふさわしいと思われるが、それはともかく、ここには鳥獸虫魚などの生き物の生態と比べて、人間の身体の醜さということが綴られている。

「禽獸」(昭8・7)には、「西洋では、産れた子供をまびく、出來の悪い子供は殺してしまふ。その方が、いい犬を作ることになるんだが、人情家の日本人には、それが出来ない」とある。ペットを育てる際にも、優生遺伝ということを考えるべきであるという主人公「彼」の考えが示されている。「彼」が四十近い独身者で、種の継続を自ら拒否しながら、ペットに対してこのような執着を示すところに、この作品の特質はある。情にすぎない人間への嫌悪が根底に込められており、人間批評としても機能している。

「この犬は今度が初潮で、體がまだ十分女にはなつてゐなかつた。従つてその眼差は、分婉といふものの實感が分らぬげに見えた。(中略)大變あどけなく人まかせで、自分のしてゐること

に、なんの責任も感じてゐないらしい。だから彼は、十年も前の千花子を思ひ出したのであつた。その頃、彼女は彼に自分を賣る時に、ちやうどこの犬のやうな顔をしたものだ」とある。

性にまつわる戸惑いの仕草について、犬からヒトを連想してしまふ非情の目を持つところに「彼」の特質はある。性につながる生命の営みに、犬もヒトも何ら違いはないという醒めた目である。対象となった犬も千花子も、「人まかせ」な点で共通しており、だからこそ「彼」は両者に引かれたのである。

『雪国』（昭23・12）の中で、葉子が湯の中で歌う、「裏へ出て見たれば／梨の樹が三本／杉の樹が三本／みんな六本／下から鳥が／巢をかける／上から雀が／巢をかける／森の中のきりぎりす 蝻／どういって囀るや／お杉友達墓参り／墓参り一丁一丁や」という唄は、生命の営みにまつわる叙情詩とも言える。植物と鳥と昆虫とヒトの生死の実相が凝縮して表されており、哀しい響きを伝えている。この「手鞠歌」が、悲しいほど美しい声の葉子によつて歌われるのであるから、まさに末期の眼を通して見られた寂しい美しさ、哀しい美しさそのものの象徴となり得ている。

因みに、この「手鞠歌」について、新潟県の湯沢町や柏崎市の観光課などに問い合わせたところ、湯沢にはなく、柏崎に似たやうな民謡があるとのことである。駒子のモデルが柏崎で働いていたことがあり、それを川端に伝えたのではないかという

のである。柏崎地区で歌われる民謡「お座敷三階節」（小唄勝太郎作）の中の一節「蝶々とんぼや蝻／お山お山で囀る／松虫鈴虫くつわ虫」を踏まえているだろうとのことである。注「手鞠歌」とこの民謡を比べると、川端が民謡を踏まえて、まったく独自なものとしていることが分かる。民謡では、昆虫についての描写をリズムカルに表しているにすぎないが、『雪国』の「手鞠歌」では、あらゆる生き物の生死の実相を哀韻を込めた歌にまで見事に昇華している。この優れた「手鞠唄」によつて、場面を活性化しているだけでなく、生命の営みにまつわる長い時間の流れを表出し得ている。

随筆「花は眠らない」（昭25・5）の中で、「ときどき、なんでもないことを不思議に思ふ。昨日、熱海の宿に着くと、床の花とは別に海棠の花を持つて来てくれた。つかれてゐるので早く寝た。夜なかの四時に目がさめた。海棠の花は眠つてゐなかつた。花は眠らないと気がついて、私はおどろいた。夕顔や夜來香のやうな花もあるし、朝顔や合歡のやうな花もあるが、たいていの花は夜晝咲き通しである。花は夜眠らない。わかりきつたことだが、初めてはつきりさう気がついて、夜なかの四時に海棠の花をながめると、なほ美しく感じられた。命いっぱい開いてゐる、せつない美しさを感じられた」とある。ここには、植物の生命活動に共感している川端がいることが窺える。

『山の音』（昭29・4）の「蟬も悪夢に怯えることがあるのだ

らうか」というような言説も、主人公信吾の感傷と捉えるのではなく、川端にある他の生き物への強い関心が反映していると捉えねばなるまい。信吾が特に関心を示しているのが、植物では落葉する公孫樹や桜や紅葉などであり、動物では産卵後亡くなる鮎や、地上での短い生を終える蟬などである。いずれの生命の営みも、はかなく哀しく見える。そこには、初老の信吾の寂しい心境も投影していると言える。ただし、『山の音』では、二千年前の蓮の実から花が咲いたという出来事にも言及しており、神秘的とも言える生命の継承にも関心が向けられている。それは、信吾に孫ができるかも知れないということのヴァリエーションとしても機能している。

「竹の聲桃の花」(昭45・12)には、「竹の聲、桃の花が、自分のなかにあると思ふやうになつたのは、いつのころからであらうか。今はもう、竹の聲は聞えるだけでなく、桃の花は見えるだけではなくて、竹の聲が見えたり、桃の花が聞えたりもする」とある。植物に対して、同じ命あるものとして認識を深めていたことが窺える。

四

以上のように年代順に見て来ると、川端の文学活動の全般にわたって、生物学的なものへの関心を明らかにすることができ

る。このことの持つ意義について、更に考察したい。

「水晶幻想」の中で、「宗教や藝術はみんな、人間が子孫のために生きてゐないといふ思ひから生れるのだつて」と、妻は夫に向かつて言う。この台詞の前に、「子孫のために生きてゐるといふことを一番はつきり知つてゐるのも人間だし、子孫のために生きてゐないといふことを一番はつきり知つてゐるのも人間だし」とある言葉を踏まえている。これらの言説は、ドーキンスの『利己的な遺伝子』に示された、個人の存在よりも種の継続、つまり遺伝子の方が重要であるという主張に通うところがある。ここには、文学を含む芸術などが、種の伝達・運搬というこのために人間は生存しているのではないことを示すべく生まれたということが表されている。人間が他の生物とは違って、創造性のある独自の知性的な存在であることを証明するために、宗教や芸術が生まれたというのである。因みに、佐倉統『進化論の挑戦』に拠ると、「ドーキンスは、神様の概念も寄生体なのではないか、と主張している。それ自体は何の機能もないのに、神的な存在をなんとなく欲してしまう人間の心の特性によつて、創造され、広まり、定着した概念」とある。ここには、宗教の発生と人間の心の特性との関わりについて言及されている。

また、「水晶幻想」の中で「顕微鏡のなかの人生と化粧鏡のなかの人生とは、どちらが寂しい」とかという妻の問いかけに、夫

は「さういふことは、ゲエテにでも聞いてもらふんだな。あいつは生物學者で詩人だからね」と答える。この台詞から、生物學者で文學者であつたゲエテに川端が関心を示していたことが窺える。ゲエテの「植物学」「動物学」など自然科学関係の著作を川端が読み、踏まえていることも考えられる。もつとも、川端があくまで文學の枠内で生物学的なものに関心を示し、表出しているのに対して、ゲエテの著作は、まさに自然科学者そのものと言つていい内容となつてゐる。

隨筆「信濃の話」(昭12・10)には、「私から文學の話をお聞になるよりも、碓氷で月でも眺めた方が、文學的にも結構なことにちがひありません。もう高原は秋の花が咲き揃ひましたが、例へばあの細い莖に、ぼつんぼつんと小さい桑の實をつけたやうなわれもかうの花、あの花を三分間でもしみじみと御覽になつた方が、下らん小説を百千冊お読みになるよりも、餘程文學的なんです。文學といふものは、さういふものであります。一枚の木の葉にでも、一匹の蝶にでも、自分の心を見つけることが出来たら、それが文學であります。輕井澤なんか實に文學だらけで、人間到るところ文學ならざるはなしであります」とある。川端が文學というものを、周りにある命あるもの、あるいは美なるものとの関わりで捉えていることが分かる。

以上述べてきたことを要約すると、川端の生物学的なものへの関心は生涯にわたつてゐると言えるが、中でも特に新感覚派

の作家として、実験的な試みをしてゐた時期の作品に顕著に見られる。生物学的な知見に関心を示し、小説執筆の際に参考にしていたことが窺える。ポネルリアやサルパなど具体的に各生物固有の生命活動や生命継承の方法にまで関心を示し、作品の中に取り込んでゐる。

人間中心主義的な生命観に対しても、懐疑的な考えを持つていたことが窺える。それは、仏教で説く万物一如・輪廻転生の説を叙情詩と捉えて賛嘆するところに顕著に示されている。あらゆる生命体を同等に捉えており、人間だけを絶対的な存在として捉える視点は乏しいと言える。

優生学に基づいた生殖にも強い関心を示していたことが窺える。その考え自体には異論もあるうが、優生学に基づいて、より良き種を求めるということが鳥や犬などのペットのみならず、人間についても意識されていたことが示されている。

注1 高辻正基は『文理シナジীরの発想——文科と理科の壁を越えて』(平10、丸善)の中で、「文系と理系が協同的に働いて、その相乗効果によつて新しいコンセプトやパラダイムを生み出す」ことの意義について述べている。

注2 羽鳥徹哉・原善編『川端康成全作品研究事典』(平10、勉誠出版)所収。

注3 磯貝英夫は「水晶幻想」(長谷川泉編『川端康成作品研究』昭44、八木書店所収)の中で、「この作品は、徹底して、性をめぐる思念と幻想によ

って成立している。性といっても、人間の情欲としてのそれではなく、生物学的次元における性——生殖である」と述べている。

注4 小澤正明は『川端康成文芸の世界』（昭55、桜楓社）の中で、『水晶幻想』の結末の「人間？ やつぱり死刑囚だったの？」について、「人間を他殺される運命から逃れられない死刑囚に譬えて」（傍点原文）いると述べているが、どうであろうか。死を宿命づけられた生物としてのヒトを、死刑囚というレトリックによって表出したものと捉えるべきであろう。

注5 岩田光子は『川端康成——後姿への独白——』（平4、ゆまに書房）の中で、『抒情歌』における川端の転生思想は、一本の草花に托された自我の投企であり、アニミズム的万物一如思想の方法化である」と述べている。

注6 佐倉統『進化論の挑戦』（平9、角川書店）に拠ると、「一九世紀後半から二〇世紀前半にかけて、世界中で優生学の嵐が吹き荒れた。」イギリスやドイツやアメリカや日本で、「ひとつのイデオロギーとして、優生思想は大きな勢力を誇った」とある。川端の優生思想については、このような時代背景も考慮しておく必要がある。

注7 因みに、『翼の抒情歌』の中にも、「一番美しい名前を持つてゐるのは、鳥類だね。獣や魚の名にくらべると。」「昆蟲は？」というやりとりがあり、鳥獣虫魚の名前の美しさが対比されている。

注8 『雪国』の中には、葉子が歌う唄がもう一箇所記されている。小豆を叩きながら「蝶々とんぼやきりぎりす／お山でさへづる／松蟲鈴蟲くつわ蟲」と歌うシーンでは、「お座敷三階節」がほとんどそのまま踏まえられている。

〔付記〕川端の本文の引用は、『川端康成全集』（平11〜12、新潮社）に拠った。